

# □ 作曲

## 石塚潤一

昨年も当欄でご紹介した、有志によるインターネットサイト「現代音楽イベントカレンダー」についての話題より始めよう。首都圏の現代音楽関係イベントについての情報が集積される当サイトにて、昨年一年に登録されたイベント数は436。一部に演奏の関わらない講演や勉強会が混じっているとはいえ、驚くべき数の公演が—多くは演奏家・作曲家の手弁当で一開催されている様子が、この「数」よりみて取れよう。

もちろん、こうした公演は玉石混濁、石の方が多いことも変わらないが、かといって、鳴り物入りで開催される大規模公演が粒ぞろいなわけでもない。「なぜ、よりによってこれを」と首を捻らざるを得ない公演も散見され、日本の創作のもっとも興味深い部分が、玉石混濁な小中規模公演の、いわば上澄みに担われていることを、再認識させられた昨年であった。

2016年は、サントリー・ホールの開館30周年に当たり、これを記念してイギリスの作曲家マーク・アンソニー・ターネジへの委嘱新作が初演された。ターネジは折衷的な語法を時にスキヤンダラスな題材と結び付け、ヨーロッパで話題の作曲家の一人ではあるが、サントリー・ホール開館時に、武満徹、クセナキス、尹伊桑、ケージ、ブソッティへの委嘱作が相次いで演奏されたことを考えれば、小粒なのは否めない。この人選の違和感は、関係する「クラシック音楽の専門家」が、真に現在進行形の創作の現場とは乖離したところにいることに抱えるものなのだろう。

ゆえに、作品・演奏ともに極めて充実した新作の発表は、(1) 現在生み出される音楽に強い関心をもち、情報収集を怠らない演奏家/演奏団体による自主的な公演、(2) 演奏家との協働を続けてきた作曲家が、信頼のおける演奏家を集めて行う自主的な公演、のどちらかで聴かれる傾向が強い。無論そうした場は、閉じた人間関係の中での馴れ合いに墮ちる危険を孕んでいるが、日本の創作の最前線がそうした「危うい協力関係」に支えられていることは紛れもない事実である。

さて、昨年は作曲家/指揮者：ブルーゼスの死去（1月5日）の報をもって始まった。第二次大戦後の前衛を牽引した「ダルムシュタット三羽鳥」最後の一人が亡くなったことは、一つの時代の終わりを感じさせるに十分だった。邦人では富田勲（5月5日）、吹奏楽の真島俊夫（4月21日）、海外からはピーター・マックスウェル・デヴィス（3月14日）、エイノユハニ・ラウタヴァーラ（7月27日）の訃報も届いた。また、柴田南雄の生誕100年、没後20年、デュティユの生誕100年、武満徹の没後20年、リゲティ、伊福部昭の没後10年当たる昨年は、今は亡き先達たちの創作に、改めて光が当てられた年でもあった。

特に、柴田南雄については、指揮者の山田和樹が音頭を取り、代表作である交響曲《ゆく河の流れは絶えずして》、《追分節考》などを再演（11月7日）、柴田個展では、西川竜太指揮女声合唱団「暁」による公演（12月17日）も印象に残った。年末には、柴田が執筆した単行本未収録の演奏会評をまとめた「柴田南雄 音楽会の手帖」（アルテス・パブリッシング）が発売され、その知的誠実さにみちた評論活動にも、再度注目が集まりつつある。

武満個展では、東京オペラシティの自主企画にて、オリヴァ

ー・ナッセンが東京フィルを指揮した公演が、60年代の実験作を含めたプログラミングで特に印象的（10月13日）。伊福部昭については、井上道義が東響を指揮して協奏作品4作品を披露した回（7月10日）で、オスティナートの音楽を厳しい統率と確かな構成で聴かせた。デュティユ作品は、オーケストラ定期のレパートリーとしてしばしば取り上げられ、カンブルランと読売日響、ノットと東響など、豊かな成果へと結実した。

リゲティについて、力が入った公演が幾つも開催されたことも忘れがたい。藝大でのリゲティ個展は、トッパンホールでのトーマス・ヘルのリゲティ公演（6月3日）と重なり、11月には北とびあで《ホルン三重奏曲》などが（6日）、12月には《アヴァンチュール》と《新アヴァンチュール》が、日本現代音楽協会の肝いりで、舞台演出付きにて演奏された（11日）。

ここからは、邦人新作で目立った演奏会を日付順に回顧していく。松平敬（バリトン）と橋本晋哉（チューバ）による低音デュオの第8回定期（3月22日）では、徳永崇《感情ポリフォニー》、川上統《児童鯨》を初演。西川竜太指揮のヴォクスマーナは創団20年を迎え、特に、渡辺俊哉《影法師》と木下正道《中心 / 記念すべき筈》を初演した。3月31日の34回定期は、現代日本の創作の到達点を示す充実したものだった。西川とヴォクスマーナは、他にも渋谷由香と山根明季子の新作を初演（7月29日）。西川はさらに他団体を率いて湯浅譲二、稲森安太己、神長貞行、北爪道夫らの作品を初演し、今年も、日本の新作演奏活動の中心にあった。初演魔としては、打楽器の會田瑞樹の名も挙げられよう。昨年はソロからアンサンブルまで24作品を初演。中でも、木下正道、福井とも子、権代敦彦らを初演した自主公演（5月6日）は特に興味深いもの。オペラシティのコンポーザムでは、一柳慧がテーマ作曲家に。新作ピアノ協奏曲を自らピアニストとして初演する（5月25日）とともに、武満徹作曲賞（5月29日）を審査、邦人では茂木宏文が第1位、中村ありすが第2位に入賞した。NHK交響楽団が贈賞する尾高賞は、権代敦彦が《Vice Versa 一逆も真なり一》で受賞。自らの別作品に、より受賞に相応しい作品があったのでは？との権代の疑問に、審査側は答えるべきだろう。これのお披露目かねたMusic Tomorrowでは、大胡恵の新作も初演（6月28日）。芥川作曲賞では、大西義明、大場陽子、渡辺裕紀子の三者が賞を競い、渡辺が受賞。ただ、審査の公開討論の席上、わきの甘い発言が幾つか聞かれ、優れた活動を続けている作曲家が、審査員として必ずしも適任でないことを確認する。鈴木純明の新作も初演（8月28日）。サントリー芸術財団が主催するもう一つのコンサートシリーズ：作曲家の個展は、本年より模様替えをして、邦人現代作曲家2人が趣向を凝らしたオケ個展を行う場となった。初回（10月28日）は、西村朗と野平一郎により、二人がピアノ協奏曲を共作する挑戦も行われたが、共作の難しさも感じ、未知の作曲家を広く紹介するという、これまでの役割を捨ててまで行うべきものなのかは疑問も。東京現音計画公演（12月19日）での、田中吉史、坂東祐大の新作も、それぞれの持ち味をいかに発揮し充実していた。

録音では、甲斐説宗の作品集が初めてリリースされたことが話題となった。fontec社が野村財団の助成により継続するシリーズの50枚目であり、1978年に39歳で早世した作曲家の極限まで切り詰めた美学が伺える一枚となった。CDリリースでは、藤倉大のオーケストラ作品集（ソニーミュージック）も興味深い。マルチ録音された素材を、作曲者自らが徹底的に編集/構成。CDを実演とは完全に別物と捉え、音響バランスなどを自らの意図に沿って一から組み立てた。ポピュラー音楽では当たり前だが、クラシックの流れを汲む現代音楽ではそう存在しなかったアプローチとして注目される。